



1



2



3

## イエッペ・ハイン 360°

2011.4.29-2011.8.31

デンマーク出身でベルリン在住のアーティスト、イエッペ・ハインの個展。美術館では日本で初めての個展となった。7つの展示室と廊下を使い、鏡を使った体感的で大掛かりなインスタレーションなど10点の作品を展示した。展覧会名の「360°」は、回転する作品を多く展示することから、作家自身が考えたものである。

展示したハインの作品は、彼の他の作品と同様、一見、極めてミニマルである。まず、色がなく、白、黒、鏡とほとんどがモノクロームだ。そして形は幾何学的で、直線、円、直角などで構成される。《見えない迷宮》という作品のように、赤外線だけで構成され、部屋は全くの空っぽという作品もある。《見えない動く壁》は、仮設壁が気づかないほどのゆっくりとした速さで

動き、位置を変えるだけという作品である。作品がミニマルであるがゆえに、ディテールを切り詰めて極めてシンプルに設計された金沢21世紀美術館の建物によく映えた。

だが、ミニマリズムや、ライト&スペースの作品も参照しつつ作られたハインの作品は、モーターによって回転し、形が変化する。例えば、《回転する正方形II》は、何も描かれていない正方形の白い紙が額の中で回転する作品である。こうした動きにより、ハインの作品は、静謐な緊張感を持った美術史上のミニマルな作品をユーモラスに茶化し、鑑賞者の気構えを解きほぐす効果を持つ。鏡が回転することによって反射する像も変化するが、見ている人もそれを追いかけてながら作品の周りを動きまわり、身体的に作品を体験することになる。観客を含む全

体の状況を一步離れて見ると、作品を体験している人の動きが主役であるようにも見える。これは、金沢21世紀美術館の建物にも共通する特徴で、建物自体に、訪れる人を圧倒するような吹き抜けなどのドラマチックな演出はなく、むしろ建物自体は透明で背後に引いており、建物の中を歩き回る人の動きが浮かびあがる。ハインは金沢21世紀美術館の設計者妹島和世、西沢立衛の建築に強い関心を持っており、カタログでは二人とハインとの対談を収録した。

展覧会に合わせ、金沢21世紀美術館をモチーフにした2つの写真作品が制作された。一つは、金沢21世紀美術館の空っぽの展示室を被写体に、正方形のフォーマットのカメラを15°ずつ回転させ、24枚で一週りさせる作品である。広報にもこのイメージを使用し、正方



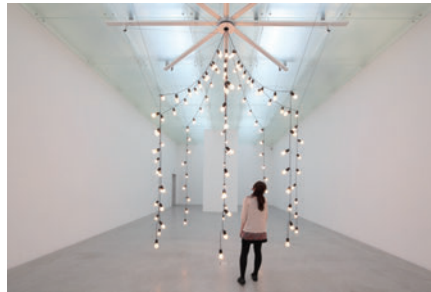
4



5



6



7



8

形のポスターやチラシを制作した。もう一つは、美術館のスタッフが黒い服を着て、人文字でアルファベットをつくる作品である。事前に撮影を行い、写真パネルにした。その文字を組み合わせ、「PLEASE INTERACT」「JOIN」「PARTICIPATE」など、イエッペの作品のキーワードとなるようなメッセージをつくり、展示会場の廊下に展示した。

展示会開始1ヶ月半前に東日本大震災が起きた。幸い金沢は被災を免れたものの、福島第一原子力発電所の事故は、ハインの住むドイツでも大きなニュースとなり、ドイツ政府は日本への渡航を自粛するよう勧告した。ハインのスタジオも、設営スタッフを日本へ派遣することを見合わせ、すでに船便で日本に向かっていた作品は急遽、日本側スタッフのみで組み立てら

れることになった。館内に展示した作品については、スカイプで打ち合わせながら組み立てることができたが、屋外に展示する予定だった噴水の作品《見えない部屋》は、技術が特殊であったため、展示を断念せざるを得なかった。噴水の形が変化し、人を閉じ込めたりもするこの作品は、建物の内外を繋ぐ役割も果たし、美術館の外側に、展示室と同じような矩形を出現させるはずだったが、残念ながら実現できなかった。

(鷺田めるろ)

1. 展示室4:《見えない迷宮》2005年
2. 展示室3:《回転する正方形II》2011年
3. 展示室1:《回転するピラミッドII》2007年
4. 展示室14:《回転する迷宮》2007年
5. 廊下:《映してください／考えてください、金沢21世紀美術館》2011年
6. 展示室6:《鏡と籠》2011年(中央)、《360°ギャラリー、金沢21世紀美術館》2011年(壁)
7. 展示室2:《光のパビリオン》2009年
8. 展示室5:《変化するネオン彫刻》2006年

Photo: KIOKU Keizo